〈資　料〉

一九四五年以降のフランス政治学

高村忠成

目次

一、はじめに
二、一九四五年の政治学の状況
三、政治学教育について
四、一九五〇年代と六〇年代の政治学研究
五、共同活動
六、現実の政治と政治学
七、政治学の現況
八、おわりに

一、はじめに

フランスにおいて政治学が、独立した学問、科学的な性格をもったそれとして出発したのは、第二次世界大戦以後、一九四五から五〇年にかけてであるといわれている。もちろん、それに対して異論もあるが、いずれにせよ一般的にいって、フランスの政治学は、日本と同様に遅れた学問であったことは否めないようである。

フランスの政治学と聞けば、すぐに、ボダンやモンテスキューやルソーやトクヴィルらが思い出されるので、その国のそれがそれほど遅れていたということは信じられないかもしれない。まして、一九世紀以降、デュルケイムやデュルケイム主義者たちのような社会学者に代表されるように、すべての社会現象を科学的に考察しようとする伝統がその国には早くから存在していたことや、また、第三共和政期にみられたような政治学研究にとって貴重な、豊富な資料となる激しい政治社会現象を考えると、とてもフランスで政治学の発達が遅れていたとは信じ難い。だが現実はその通りであったようである。

フランスでは、哲学や古典文学に対抗して、社会学が、まず大学の文学部の中に誕生したが、政治学は独立せず、主として法学にその身をゆだねていた。たとえば、国家の研究などは法学者によって純粋な法規範現象として取り扱かわれていたのである。この点についてたとえば、デュギー（DUGUIT）は次のようにいっている。〝政治現象は、国家の起源と機能に関する現象である。すなわち、それは本来的に法現象であり、正確にいえば、憲法領域を形成する問題である。そして、いわゆる政治学は、憲法以外の何ものでもない。それは法についての総合科学の分野である〟（"Le droit constitutionnel et la sociologie," *Revue internationale de l'enseignement* (1889) と。ま

た、一八七二年にパリに、私立政治学院 *Ecole libre des sciences politiques* が創設されたが、これは純粋に政治学を研究するための機関というよりも、高級官吏登用試験を受験する学生のための予備校のような性格をもっていた。そのためそこでは、経済学、法律学、歴史学の教育などが主であった。さらに、二〇世紀に入っても一九四五年までは、政治学は名目上の存在でしかなかったといっても過言ではない。すなわち、政治学者の学術共同体も、政治学の雑誌も、専門の研究センターも、さらに概説書すらもなかったのである。また、政治学を研究している人々も孤立しており、有機的総合的ではなかった。じつにこの意味で、一九四五年以前のフランスには、自立・独立した、またいわゆる科学としての政治学は存在していなかったといわれているのである。

本稿は、右にのべたようなフランスにおける政治学がなぜ遅れたかについての理由、原因にはふれない。むしろ、一九四五年以降のフランスにおける政治学がどのような様相をもって発達してきたのか、その概要を主として研究者や主な業績を中心に紹介することを目的とする。

二、一九四五年の政治学の状況

一九四五年以前のフランスにおける政治学は、一言でいえば、歴史学・法律学・地理学の娘であった。そのため、一九四五年にフランスの政治学が自立しはじめると、それはまず研究領域の確定に取り組んだのである。当時の政治学の主たる対象領域は次の三点に大別できる。

第一に、憲法の研究と政治理念・政治制度の歴史研究である。

○ 憲法の研究については、様々な政治理論や国家の改良計画の提示と同様に、政治体制の比較研究と分類・政治制度の機能を含み、主たる業績には以下のものがある。

Georges BURDEAU, *Le droit public et l'Etat*, 1943; *Traité de science politique*, I, 1949

Georges VEDEL, *Manuel de droit constitutionnel*, 1948

Maurice DUVERGER, *Manuel de droit constitutionnel*, 1948

○ 政治理念と政治制度の歴史については、

Jean-Jacques CHEVALLIER, *Les grandes oeuvres politiques de MACHIAVEL à nos jours* (première édition, 1949; 2ème édition, 1976). *Histoire des institutions et des régimes politiques de la France moderne* (la première édition de 1952 porte sur la période 1789—1945; la dernière date de 1972 et est mise à jour jusqu'en 1962) が著名である。

第二に、現代史の領域である、現代史をあつかうのが、政治学の主要な目標であった。それゆえ、そこには、たとえば諸国家の歴史や人文地理・経済学も含まれるが、一応その完成をみたのが、外交史研究であった。また、この領域は、その後、専門化され、その中から政党研究の端緒もひらかれたのである。

François GOGUEL, *La politique des partis sous la IIIème*

République (1946) が先駆的なものである。

第三に、科学的モデルに近い分析方法を用いたものとして選挙の研究に関する分野がある。この分野は、一九一三年に、André SIEGFRIED がすでに、*Tableau politique de la France de l'Ouest sous la IIIème République* を著して先駆を切っていたが、この流れを受けついで、一九四五年以降フランス選挙社会学 la sociologie électorale française として活発になったのである。たとえば、F. GOGUEL は、*Esprit* 誌の中で、一九四五年から五一年にかけての選挙の調査にもとづいて、選挙地理学 géographie électorale の論文を発表し、A. SIEGFRIED は、一九四九年に、*La géographie électorale de l' Ardèche sous la IIIème République* を著した。さらにそれら以外にも選挙社会学の業績として、たとえば、"Cahiers de la fondation nationale des sciences politiques" のコレクションの第一巻の中に次のような論文が見い出せる。

le "Cahier" n° 1, *Etudes de sociologie électorale*

le "Cahier" n° 16, *L'influences des systèmes électoraux sur la vie politique* (sous la direction de M. DUVERGER)

les "Cahiers" 26 et 27, *Sociologie électorale, esquisse d'un bilan* par F. GOGUEL et G. DUPEUX et *Géographie des élections françaises de 1870 à 1951* par F. GOGUEL.

またこの点について、次の論文もある。

Georges DUPEUX, "Le comportement électoral, revue des recherches significatives et bibliographie," *Current Sociology*, volume III, n° 4, 1954—1955, pp. 281—344.

三、政治学教育について

つぎに、フランスにおける政治学の教育関係について、その概要をまとめておこう。フランスの政治学の教育組織は一九四五年以降次のような変遷をへてきた。

第一に、一九四五年から一九五四年にかけて。この間の事情は比較的単純で、政治研究所 les Instituts d'Etudes politiques (I.E.P.) だけが、〝政治研究 Etudes politiques〟と印された証書を発行した。それは、バカロレアを取得したあとすぐに研究所に入り、3年の修業年数をへて得ることができた。この間、大学の法学部と文学部は、たとえ、政治研究所で教えている科目に類似したものを教授していたとしても、政治学に関する何らかの特別な証書を発行することはなかった。

第二に、一九五四年から一九六八年の五月革命の直後に至る期間である。この間、大学の学部の中で抜本的な改革が行われ、政治学は法学部の中で公認の科目となった。つまり、つつましくはあるが、それは、体系的に法律研究と同等にあつかわれるようになったのである。しかも同時に、全国的に政治学の教育と計画について整備がなされ、すべての法学部は、その講義の五分の一に政治学に関連した科目を設置するようになった。当時の教育リストは次のとおりである。

Droit constitutionnel et institutions politiques

Introductions à la sociologie politique

Institutions internationales
Méthodes des sciences sociales
Histoire des idées politiques jusqu'à la fin du XVIIIème siècle
Histoire des idées politiques à partir du XIXème siècle
Grands problèmes politiques contemporains

第三に、一九七〇年以降である。この間に政治学についての大学の規定は大幅に改善された。一九六八年五月以後、表決された la loi d'orientation により確立された大学の自治で、大学が自主的に政治学の教育を殖やしたり変化させたりして良いことになった。さらに、従来の学部 faculté を解体してより小規模で、しかも従来の教科の枠に捉われない、パリ第一大学政治学教育・研究単位 Unité d'enseignement et de recherche de science politique de l'Université de Paris I や、ボルドーの地方生活研究センターのような新たな研究・教育機関の創設も認められたのである。そして、一九七八年には政治学の修士課程が設置され、その資格をえるには、政治行動分析・政治学の方法と資料処理・比較政治制度と機構・政治哲学とイデオロギー分析が必修の課目とされた。また、政治学の高等教授になるためには専門の試験 concours spécialisé が必要とされ、ここに政治学と法律学の分離が成立したといってよい。

フランスの政治学の教育過程をまとめてみると次のようになる。学士号は、原則として高等教育のバカロレアに合格したあと3年で取得できる。但し、この段階では政治学は専門化されておらず、政治学の学士号ではなく、多くは法律学の学士号である。政治学における専門の修士号は一年で得られる。また、政治学の第三期課程修了証（法学部または政治研究所における）は一年で取得できる。しかしそれに続いて、政治学第三期博士号または国家博士号のためには学位論文が要求され、前者のためには二年から五年、後者のためには前者以上の研究期間が要請される。そして、政治学の専門の資格をもつ教員になるためには、国家試験を受験しなければならない。すなわち、教授になるには、まず大学で、ついで大学団体高等評議会でおこなわれる教授資格 l'agrégation を取得しなければならないのである。しかもそのためには、政治学国家博士号を有し、さらに追加研究の仕事を続けることが条件とされている。

四、一九五〇年代と六〇年代の政治学研究

この間は、フランスの政治学にとっていわば過渡期ともいうべき性格をもっているが、業績と方法論においては著しい進歩があった。そこでここでは、(1)主要文献(2)方法論の発展、についての概要を紹介しておこう。まず、(1)については、最初に、年代別の概説書を、次に、テーマ別の主要文献を例示する。後者については、引用された度数が多かったものである。

(1) 主要文献

○ 一九五七―一九六〇年のフランス政治学の情勢を把握したもの

R. ARON, Ch. EISENMANN, M. DUVERGER, F. GOGUEL, P. RENOUVIN, L. KOPELMANAS の論文。それらは、*La science politique contemporaine*, UNESCO, 1950, 740 pages である。さらに、次の二点に留意。
R. ARON, "La science politique en France". L. KOPELMANAS, "L'enseignement et l'organisation de la recherche en matière de science politique en France".

○ 一九五七―一九六〇年のフランス政治学の情勢を把握したもの

Roy C. MACRIDIS and Bernard E. BROWN, "The Study of Politics in France Since the Liberation : A Critical Bibliography", *The American Political Science Review*, Vol. LI, n° 3, Sept. 1957, pp. 811—826.
La science politique en France, Bibliographie commentée, sous la direction de Jean MEYRIAT, Presses de la Fondation nationale des sciences politiques, 1960, 136 pages et Alfred GROSSER: "La science politique en France", *Tendances*, n° 8, décembre 1960, pp. 469—491.

○ 一九六五年のフランス政治学をまとめたもの

"La science politique," *Revue de l'enseignement supérieur*, 1965.

○ 一九六八―一九六九年のフランス政治学を展望したもの

François GOGUEL, "Situation de la science politique en France," *Annuaire suisse de science politique*, n° 8, 1968, pp. 19—30.
Association française de science politique, "L'état de la science politique en France," débat introduit par Serge HURTIG, *Entretiens du samedi*, n° 10, mars 1969, ronéographié, 45 pages.

○ 総合的な業績（政治学の対象・方法・業績が体系的に提示されている。これらは大学での教育の成果である）

Maurice DUVERGER, *Méthodes de la science politique*, 1ère édition, 1954.
Madeleine GRAWITZ, *Méthodes des sciences sociales*, dernière édition, 1972.
Jean MEYNAUD, *Introduction à la science politique*, 1959.
Georges BURDEAU, *Traité de science politique*, en 7 tomes parus de 1949 à 1957 (seconde édition, neuf volumes, 1966—1976).

○ 政治理論

Bertrand de JOUVENEL, *Du pouvoir*, 1947, *De la souveraineté*, 1955, *De la politique pure*, 1963.
Eric WEIL, *Hegel et l'Etat*, 1950, *Philosophie politique*, 1956.

Julien FREUND, *L'essence du politique*, 1965.
Raymond ARON, *Etudes politiques*, 1972.

○ 政治思想史

Jean TOUCHARD, Louis BODIN, Pierre JEANNIN, Georges LAVAU, Jean SIRINELLI, *Histoire des idées politiques* (première édition, 1959). この分野は文献が多岐にわたるが前掲書の中の参考文献を参照されたい。

○ 政治制度

Raymond Aron, *Dix-huit leçons sur la société industrielle*, 1962, *La lutte des classes*, 1964, *Démocratie et totalitarisme*, 1965.
それ以外に、Maurice DUVERGER, André HAURIOU, Marcel PRELOT などの憲法の角度から分析した著作が参考になる。
François GOGUEL et Alfred GROSSER, *La politique en France*, cinquième édition, 1975. 教育学的綜合の観点でまとめられている。
René REMOND, *La vie politique en France depuis 1789*, deux volumes parus, 1965, 1969, un troisième à paraître.
Jacques CHAPSAL et Alain LANCELOT, *La vie politique en France depuis 1940*, cinquième édition sous presse. 歴史的性格が濃い。
Pierre AVRIL, *Le régime politique de la Vème République*, deuxième édition, 1967.
Jean GICQUEL, *Essai sur la pratique de la Vème République*, 1968. 以上公法の博士論文。
Georges BERLIA, Léo HAMON の議会生活と法についての編年史の角度からの著作。
André et Suzanne TUNC, *Le système constitutionnel des Etats-Unis d'Amérique*, deux volumes, 1954.
André MATHIOT, *Le régime politique britannique*, 1955, *La vie politique aux Etats-Unis et les tendances récentes*, 1956. 外国の政治体制を憲法的な視点から考察した。以下はそれを現代史の角度から政治分析したもの。
Alfred GROSSER, L'*Allemagne de l'Occident*, 1945—1952, 1953, *La Démocratie de Bonn*, 1949—1957, 1958.
François FEJTO, *Histoire des Démocraties populaires*, tome I, 1952, tome II, 1969.

○ 政党

Maurice DUVERGER, *Les partis politiques*, 1951.
Georges LAVAU, *Partis politiques et réalités sociales*, 1953, et ses articles, "Partis et systèmes politiques: interactions et fonctions", "A la recherche d'un cadre théorique pour l'étude du Parti communiste français"
Albert MABILEAU, *Le parti libéral dans le système*

constitutionnel britannique, 1953.
Jean-Louis SEURIN, *La structure interne des partis politiques américains*, 1953.

○ 感性の歴史
René REMOND, *La droite en France de la première Restauration à la Vème République* (troisième édition, deux volumes, 1968).

○ 圧力団体
les livres de Jean MEYNAUD et diverses recherches, comme celle de Stanley HOFFMAN et al. sur *Le mouvement POUJADE*, 1956.

○ 選挙行動
1956—1967の選挙については、la Fondation nationale des sciences politiques の *Cahiers* に詳しい。

○ 政治心理学
Alfred SAUVY, *Le pouvoir et l'opinion, Essai de psychologie politique et sociale*, 1949, et *La nature sociale, introduction à la psychologie politique*, 1957.
Jean STOETZEL, *Les sondages d'opinion publique*, 1948 et *Psychologie sociale*, 1963.

○ 国際関係
Pierre RENOUVIN et Jean-Baptiste DUROSELLE, *Introduction à l'histoire des relations internationales*, 1964.
Raymond ARON, *Paix et guerre entre les nations*, 1962.
Jean GOTTMANN, *La politique des Etats et leur géographie*, 1952.

(2) 方法論の発展

政治研究の方法は大別すると二つに分けられる。すなわち、ひとつは、言葉の狭義のそれであって、具体的には、資料を収集・蓄積し、それを分析する技術のことであり、もうひとつは、広義に解釈した場合である。それには、法的分析の後退と社会学的な方法の進出、マルキシズム方法論の出現、理論研究の新視点の導入、比較法の見直し、モデル化 modélisation の試み、などがある。そしてこの期間における方法論はとくに、狭義のそれが発展をみたので、以下その点について概要を記す。

一九四五年以降のフランス政治学の方法論の発達は、基本的には、まず資料分析と観察技術においてみられた。とくにそれが著しかったのは、具体的には世論研究の分野であった。世論調査によるアンケートは体系的であり、その技術はほぼ完璧に近かった。ただ惜しむらくは、調査結果が、アンケートを行った人の個人的所有物に終り、学界共有の財産に供せられることがなかった点である。

その後、観察技術はそれほど進歩しなかったが、資料分析の方は、二つの方向において発展を示した。最初の方向は、政治

演説の分析の方向であり、言語学的分析の性格をもっていた。その点についての業績として次のものが指摘できる。Pierre FAVRE の "Analyse de contenu et analyse du discours, sur quelques critères distinctifs" dans *Etudes offertes au professeur E. de LAGRANGE*, Faculté de Droit de CLERMONT, PARIS, L.G.P.J., 1978, pp. 293—328.

また、一九八〇年十月に、政治辞学者のための雑誌ができた。*MOTS, Mots...Ordinateurs...Textes...Sociétés* (Presses de la Fondation nationale des science politiques).

第二番目の方法は、統計的分析の方向である。これは電子計算機の発達によるものであり、とくに、類型学分析や因子分析などの multivariées の分析の増大になってあらわれた。そして、それに伴って、選挙資料センター banques de données électorales, à la Fondation nationale des sciences politiques à Paris, et à Grenoble au C.E.R.A.T. が設立されたのである。

五、共同活動

(イ) 学会

フランスの全国的な政治学会はただひとつである。フランス政治学会 *l'Association française de science politique* がそれであり、これは一九四九年に設立された。運営は理事会が行っており、歴代の理事長は、André SIEGFRIED, Jean-Jacques CHEVALLIER そして現在の François GOGUEL である。なお、事務局長は、Jean CHARLOT, Alain LANCELOT そして現在は Jean-Luc PARODI である。会員は約六百名で、パリの la Fondation nationale des sciences politique で研究計画をたて、ひんぱんに円卓会議や討論会などを行っている。そして、学会内部に専門の研究グループが設置されている。たとえば、フランス議会政治研究専門部会、社会党研究部会、ヨーロッパの共産主義運動研究部会などである。他の分野と同様に政治学会も中央権化されており、地域的な学会はないが、唯一の例外として、Groupe lorrain de science politique de NANCY がある。それは一九七四年に創設された。

(ロ) 紀要

政治学研究のための唯一の雑誌は、フランス政治学会が監修し発行している la *Revue française de science politique* である。実際の編集指揮は、George LAVAU がとっている。なお、la *Revue du droit public et de la science politique* は、そのタイトルにもかかわらず政治学関係の論文には例外的にしかページをさかず、逆に、前者の方は、憲法やフランスや外国の議会研究に紙面を提供している。ともあれ、*la Revue française de science politique* は一九五一年に創刊されたが、以後内容的には次のような変遷をたどりながら発展してきた。

まず、一九五〇年末までは、その寄稿者は大部分が教員であった。法律、歴史、哲学の教授たちである。次に、それは殆ん

ど la Fondation nationale des sciences politiques の専属の紀要になった。論文の大部分は、特定の問題を対象とし、論評、解説を加えない事実のみに関する業績を掲載していた。そして、ここ数年にきて、この雑誌はより多様性のある論文を集めるようになり、とくに、理論的な論文を中心に載せている。

なお、前掲誌がフランスにおける政治学の唯一の専門誌であるとはいえ、政治学関係の論文は、それ以外にも、沢山の様々な雑誌に発表されている。その特徴は次の四点に分けられる。

第一に、社会学の雑誌である。そこには、政治社会学の論文や、あまり対象を専門の政治次元の問題だけに絞ったものではない論文も掲載されている。次のような雑誌が主なものである。

la *Revue française de sociologie.*

Actes de la recherche en sciences sociales (revue du Centre de sociologie européenne que dirige Pierre BOURDIEU).

les *Cahiers internationaux de sociologie.*

les *Archives européennes de sociologie.*

l'*Année sociologique.*

第二に、特殊な対象をあつかう雑誌として次のようなものがある。

la revue *Sondages.* 一九三八年以来、l'Institut français d'opinion publique によって発行されている。

la revue *Relations internationales.* 主に歴史的な性格が濃い。

la revue *Sociologie au travail* と la Revue *française d'administration publique.*

第三に、あまり学術的でない雑誌。これは学術共同体に対してというよりも、教養向けに編集されたものであり、政治生活に関する研究を優先している。とくに政治にかかわっている人々に発言の場を与えている。

Pouvoirs (qui porte en sous-titre : "Revue d'études constitutionnelles et politiques"). これは、一九七七年五月に第一号が出た。

Projet. 各選挙のあとに発行され、Alain LANCELOT による結果についての分析論文がのる。

la Revue *politique et parlementaire.*

最後に、文学的な雑誌がある。編集者に政治や哲学の関係者がなったり、また、人文科学にひらかれたりしている。そのため、政治理論や政治分析の論文が徐々にふえている。

Espirit, Les temps modernes (revue créée par Jean-Paul SARTRE), *Critique, Preuves, Contrepoint* など。

(ハ)　業績の収集

政治学の業績を収録したフランスで最も古いコレクションは、"Cahiers de la Fondation nationale des sciences politiques" のそれであり、第一巻は一九四七年に発刊されたが、そこには二百以上の作品が発表されている。一九六〇年代に

は、la Fondation nationale des sciences politiques の庇護により、collection des "travaux et recherches", "bibliographies", "répertoires documentaires", "guides de recherches" "atlas" などが発行され、ついに、一九七六年には、*les Presses de la Fondation nationale des sciences politiques* の創設となった。それはフランスにおいて唯一政治学を専門に出版しているものである。

なおフランスでは、政治学概論は、政治学が通常法学部で教育されている関係上、法学概論のコレクションの中に入っている場合が多い。例えば、以下のものである。

la collection *Thémis* (dirigée par M. DUVERGER) aux Presses Universitaires de France.

la collection des *Précis Dalloz* (Editions Dalloz)

la collection *des Précis DOMAT* (Editions MONTCHRESTIEN)

la *collection U* (U pour Université) chez Armand COLIN.

だからといって、フランスでは政治学の本は少ししか発行されないということではない。政治学研究の成果は規則だって発刊されることはないかもしれないが、多様なコレクションの中でみい出すことができるのである。また、教員が学位取得のためにかいた論文、メモなども、それらは公刊されていなくても重要なものが多い。例えば、一九六四年以来発刊されている La *Revue française de science politique* は、主に毎年第二号で un "Etat des travaux inédits de science politique" を特集している。これには、研究報告を除いた講義録プリント、メモワール、論文が掲載されている。これ以外に政府機関と提携して行っている研究報告などもある。

六、現実の政治と政治学

(イ) 政治的諸事件の政治学への影響性

フランスでは、現実の政治的諸事件が政治学に及ぼす影響はかなり大きいといってよい。換言すれば、フランス政治学は、その研究対象の選択を政治的諸事件にかなり依存しているといえる。フランスの政治研究者は、事件が起るとそれが政治生活にいかなる影響を及ぼすかを真先にとりあげる。その結果が、一九五八年以降のフランスでひんぱんに行われた選挙の調査であり、飛躍的発展をとげた社会党研究であり、またヨーロッパ建設に関する問題などである。これらは、フランス政治学研究センターの主要なひとつである la Fondation nationale des sciences politiques の CEVI-POF (Centre d'étude de la vie politique française) から出された。

このような傾向はフランスでは昔から存在しており、非政治化のテーマが流行したり、第四共和制の終焉、すなわち権力の擬人化とドゴール将軍の大統領についてのテーマなどが流行したのもこの類いといってよいであろう。そして、このように政治学が現実との接点を強くもつので必然的にフランスの政治学者は、ジャーナリストとその固有の領域をめぐって衝突し、それを凌駕しようと試みることになる。たとえば、*Le Monde* に

は政治学者の書く政治社会学の論文が多くなってきている。だがその結果は、政治学者が現実に埋没し、本来の研究とでもいうべきものをおろそかにする傾向となってあらわれてきた。すなわち、経験的な仕事に、より強固な土台を与える認識論や、政治または社会学理論のような理論研究が軽視されがちであるということである。

(ロ)　政治学者と政治行動

フランスにおける政治学者の現実政治へのかかわり方は、三種類に大別できる。すなわち、第一に、実際に身を政界に転ずる者。これは数としてはそう多くはない。たとえば、閣僚になった人として、Léo HAMON, René CAPITANT、下院議員になった人として、J.P. COT、上院議員として、Marcel PRELOT、また権力の極からは少し離れているが Conseil constitutionnel に、François GOGUEL らがあげられる。彼らの政治手腕が果して、政治理論のようにうまくいったかどうかは、他の分野の場合と同様、若干の疑問はある。第二に、政界の前面には出ないが、助言者になったり政策決定に影響を与えている者。フランスではこの立場はかなり力をもつといってよいであろう。たとえば、一九六四年から一九六五年の間の普通選挙による第一回大統領選挙の時、専門家あるいは黒幕として辣腕をふるったのは、G. VEDEL, M. DUVERGER, G. LAVAU らである。また今日でも、与・野党の参謀として選挙社会学の知識を駆使して助言している人もいる。第三に、道徳的司法官としての職務をまっとうしようとする者。すなわち、世論を啓発したり新聞などの公器を用いて、政策決定者に影響を与える人である。Raymond ARON, Maurice DUVERGER, Alfred GROSSER らがそれであり、GROSSER はドイツでも重要な役割を果し、一九七五年平和賞を受賞した。

フランスの政治学者またはその教育者の社会的地位は決して高くない。政治指導者の富と名声にくらべれば微々たるものである。しかし、今後彼らはその地位の向上を求めて活発に活動するであろう。このことはある意味では極めて重要である。というのは、現在フランスの政治学者の現実政治へのかかわり方は必ずしも強くないし、しかもフランスの政治指導者は E.N.A 出身者でかためられつつある。しかも彼らは I.E.P. で教育をうけ、中にはそこで教育をする者もいる。ということは、政治権力者が、批判的な政治学も、専門的な政治科学も身につけなくなるということであり、この意味においても政治学者の現実政治に対する影響力、換言すれば、支配階級に対する文化的影響は重要になってくるといえるのである。

(ハ)　公権力と政治学の関係

フランスでは一般に、知識人は権力に対する永遠の敵対者であるという名声をえているし、彼らもそうありたいと望んでいる。だから、政治指導者たちも、基本的には政治学者を、たとえ相談役として用いようとも、選挙の際に彼らの専門の能力を借りようとも、あまり信用していない。こうした事情もあって、フランスでは政治学は、研究予算面や教育者・研究者の面などでその数はあまり多くないとされている。要するに、政治学は

その実際的効用と学問的正統性が限定されたものでしかないように思われているのである。ただまれには、政治研究所が設置され政治指導者の育成がはかられたり、また一九七七年には、*Institut des sciences de l'action* (Institut Auguste Comte) が設立され、高度な能力と経験をもつ〝決定者〟が養成されたりはしている。しかし、そこでも政治学の地位は低く、無に等しいといっても過言ではない。公権力と政治学とは融合しにくいというべきであろうか。

七、政治学の現況

さて、フランス政治学が直面している問題、現況として次の三点が特色として指摘される。すなわち、第一に、政治学の研究対象領域が本来研究されるべきものと比較すると少ないということ、第二に、政治学は非常に細分化されており、しかも相互に連けいがなく孤立しているということ、第三に、政治学固有の研究対象領域と思われたものが、社会学や歴史学によって浸蝕され、政治学としては、新たな研究対象をさがす必要にせまられているということである。

まず第一の点については、フランスの政治学が主として研究対象としている問題を例示してみよう。

a、選挙行動—これはフランスのすべての研究者が最後には取り組む問題である。André SIEGFRIED が先達であるが、現在この分野の専門家として、Frédéric BON, Jean CHARLOT, François GOGUEL, Jérôme JAFFRÉ, Alain LANCELOT, Guy MICHELAT, Jean-Luc PARODI, Jean RANGER らがいる。

b、憲法と政治制度に関するもの—諸制度と諸権力間の関係、政府の決定のメカニズムと議会の機能の形態、制度と政治の歴史研究などがこの類いであり、この分野は伝統的な法的研究の性格をもち、研究者の数も大変多い。ただこの面の研究には次のような問題がある。

(イ) フランスでは諸制度に関する業績は多いが、驚くべきことに、その多くは民主主義理論に関する考察を欠いている。たとえば、ポリアーキー polyarchie 概念の深化、使用が殆んどみられないということである。

(ロ) 国家と諸権力の均衡が多数の研究対象になっているが、国家の最も強制的な装置の研究が少ない。すなわち、法的権力、警察、軍の研究がかえりみられないのである。この理由は簡潔にいえば二点ある。ひとつは、フランスの大学は、多くはイデオロギー的には左で反権威的・反軍事的である。そのためすきでもない問題に研究時間をさくことをしないこと。もうひとつは、社会学者が象徴支配のメカニズムを特別視し、そのため国家の抑圧的装置の研究を嫌ったこと。

(ハ) 政治勢力の中では政党の研究が一貫して活発であるということ。この分野は周知のように M. DUVERGER が先駆を切ったが、一九七一年に Jean CHARLOT（ゴーリスト運動研究の専門家）が理論分析のレベルで新しい視点をひらいた。彼は、*Les partis politiqus* (Librairie A. Colin) を著し、フ

ランスにアメリカの政治科学の方法を導入したのである。

(ウ) その他の政治勢力は分断の運命を味う。すなわち、六〇年代に流行した圧力団体は、農民の圧力団体を除き、もはやあまり研究されなくなった。但し、労働組合の研究は続行されている。

c、政治思想、政治哲学、政治イデオロギー――この分野はフランスでは伝統的なものであり、しばしば政治思想史という形で現われてきた。

d、外国の政治生活、政治制度―この分野の代表的な専門家には次のような人がいる。Alfred GROSSER（ドイツ研究）、Monica CHARLOT（イギリス研究）、Hélène CARRERE d'ENCAUSSE（ソ連研究）、M.F. TOINET（アメリカ研究）、G. HERMET（権威的体制研究）、J. LECA（アフリカ北部地方研究）などである。

e、国際関係―現在フランスで政治研究の中で市民権をかちえつつある。主なものに、Centre d'etudes des relations Internationales (C.E.R.I.) de la Fondation nationale des sciences politiques での欧州統合の諸業績や、Pierre HASSNER, Alfred GROSSER, Marcel MERLE らの仕事がある。

なお、以上の五部門以外に、数としては少ないが、現在行われている研究として次のようなものがある。政治的社会化の研究（Annick PERCHERON de la F.N.S.P. の業績）、政治的コミュニケーションとマス・メディアの研究、地方政治の生活に関する研究、リーダーの分類と政治家研究、そして、最近はとくに行政学の研究がその遅れを取りもどそうとするかのように活発に行われている。Jacques CHEVALLIER と Danièle LOSCHAK による *Science administrative*, deux tomes, Paris, L.G.D.J., 1978. を参照。

そして、フランスの政治学にとってまだ未開拓の分野として、次のものが指摘できる。

a、認識論、政治学の歴史と社会学、方法論的問題提起、理論化（命題の体系化であり、これによって研究対象を報告しようとする）、資料の処理とモデルの設定に関する理論的考察。これらはまだ研究が少ない。

b、公共政策、行政政策、社会政策、教育政策などの研究。今日では、これらはまだ無視されているに等しい。

c、政治発展、政治動態に関する研究。たとえば、大衆運動、内乱、革命の研究も遅れている。他の用語でいえば、社会的政治的動態研究ということになろう。

d、政治文化、les représentations collectives, la mémoire collective に関する研究。

ただし厳密にいうとcとdは全くの未開発の分野ではなく、例外として、Serge BONNET の la *Sociologie politique et religieuse de la Lorraine*, 1972 がある。

フランスの政治学は、以上のように対象が限定された研究については多くの業績を出してきた。だがまだ対象が明確になっていないものについては、現在進行中であるといえる。ともあれ、フランス政治学は遺産の学問であり、過去の伝統をうけつ

ぎながら発展してきた。今後、現在手がけられている研究分野がどのように学問的に構築され、その展開がはかられていくか注目に値しよう。

第二に、政治学の細分化の問題である。かっては、フランスでも政治学の対象領域・方法などについて研究者の間では、一元的傾向がみられたが、今日ではそのような一元化は希薄で、むしろ増々多様化してきているといえる。その分派傾向は、まだ学派形成とまではいかないがともかく分立しており、各々は接点ももたなければ、論争もしない。むしろ互いに無視しあっているといった方がよいであろう。そこでこれらの多元的傾向を分類してみると次の五つになる。

第一の傾向は、いわゆる法学者と憲法学者の傾向ともいうべきものである。この特色は、主として la revue *Pouvoirs* 誌の中にみられる。そこでは、多くの業績・書物・概論を指導しているが、この傾向の人々の研究方法は、法律分析に結びついた直接に観察できる資料の総合的な記述であり、その対象は、政治生活と諸制度の研究である。また、この傾向の人々には大学の教員が多い。よって、以上の点からわかるように、この傾向の政治現象へのアプローチは、長い間法学部で打ちたてられてきた伝統的な色彩が濃い性格のものであるといえよう。

第二の傾向は、経験主義的と称せられる研究者たちである。政治学における現代的な経験主義とは、因子分析、類型学的分析など資料を数学的に処理する形態をさす。そしてその資料は、多くの場合、磁気テープが使用され、そこには主として、選挙結果、世論調査、政治家の声明文などが収録されている。近年、この方面の対究は、選挙予測やシミュレーションなどの社会的要請もあって大変活発である。なお、この経験主義の範疇には、〃事実〃の記録を丹念に行っている研究者も入れることができる。彼らは、諸事実を観察や出版物の分析によって収集しており、この成果は、フランスや外国の政治生活に関する研究、国際関係に関する研究などになってあらわれている。たとえば、国際関係については、Jean LECA, "Crises et conflits au Proche-Orient," la *Revue française de science politique* (août 1974) がある。

第三番目の傾向は、マルキシズムのそれである。この面での業績としては、哲学者 Louis ALTHUSSER, Nicos POULANTZAS らのものがある。この傾向の研究は、歴史的に新しいものではないし、又、その内部においても分裂しているが、依然として根強い影響力をもって存続している。

第四番目の傾向は、経済モデルの側面から政治知識を新しく導入する原則を探究しようとするものである。相互作用主義 *l'interactionnisme* というような真のパラディグム paradigme (範列) を実際に適用しようとこの傾向の研究者たちは望んでいる。すなわち、集団行動は、個々人の自発的諸活動の相互作用 (凝集) のメカニズムを解明するならば把握できるのではないかとの考え方である。この傾向については、政治領域における DOWNS, OLSON, HIRSCHMANN や新古典経済学者、les théoriciens des jeux らがいる。ただこの傾向の人々も現

在再編成の途上にあり、いわば討議を行っている。段階である。その意見は、しばしば la revue *Contrepoint* や *Analyses de la* S.E.D.E.I.S. の中で表明されるが、そこにみられる人間行動学についての強固な考え方は、民主的制度を改善し、西洋社会における多元主義を維持し、自由体系を理論的に確立することを可能にする諸価値を考察するというものである。

第五番目の傾向は、社会学者の傾向である。すなわち、それは、マルクス・デュルケイム・ヴェーバーという三人の社会学の祖に共通している方法論的原則にしたがってつくりだされた説明的命題を樹立しようとする。いわば、政治社会学者とでもいうべき立場であろうか。彼らは、認識論の Gaston BACHELARD によって使用された"適用された合理主義 rationnalisme appliqué"を採用しようとしている。この傾向の人々には'J.P. COT と J.P. MOUNIER(*Pour une sociologie politique*, Paris, Seuil, 1974 の著者)'、D. GAXIE (*Le cens caché*, Paris, Seuil, 1978 の著者)'、B. LACROIX (*Durkheim et le politique*, Paris, Presses de la Fondation nationale des sciences politiques, 1980 の著者) らがいる。

なお、ここに列記したこれらの五つの傾向は分立しているとはいえ、フランスの政治学者の多くは、実際は、二つないしはいくつかの傾向にまたがっているということを最後に附記しておこう。

第三に、政治学と他の学問とくに歴史学や社会学との関係に移ろう。前述したようにフランス政治学は（もっともこれはたんにフランスだけの問題ではなく政治学全体の問題ではあるが)、今日、その研究対象領域を他の学問から浸蝕されつつある。たとえば、哲学者、社会学者、歴史学者などは、選挙・政治制度・政治生活のエピソードなどについては、制度的な政治学にその研究をまかせているが、しかし、権力や支配の諸形態など元来は政治学があつかうような問題を、今日では積極的に、いな独占的に研究している。政治学にとっては、これらの他領域からの攻勢に対して、いかにそのアイデンティティを確立し、保持するかというのがその課題になってきたといえよう。ともあれ、政治的な諸問題をあつかっている広範な観点からの主な業績と代表的な人物について簡単に紹介しておこう。

まず、Alain PEYREFITTE, *Le mal français*. (フランスの政治社会像を描いた)'、André GLUKSMANN, *La cuisinière et le mangeur d'hommes*, *Essai sur l'Etat, le marxisme, les camps de concentration*, *et Les maîtres penseurs*, B.H. LEVY, *La barbarie à visage humain* (これらは'SOLJENITSINE の影響をうけ'一九七七年にさかえた)らがいる。

つぎに、より学問形成の規範に適合したものとして以下のものがある。Louis ALTHUSSER の業績（マルクス主義者の彼の作品は、現代フランス思想にかなりの影響を与えている)'、Cornélius CASTORIADIS や Claude LEFORT のような哲学者の業績（二十年来'ソビエト官僚制や歴史の運動と社会の基礎について考察してきた)'、Gilles DELEUZE Félix GUATTARI, de Pierre LEGENDRE らの作品（精神分析学を

用いている—権力にフロイトの問題提起を適用した)。

そして、政治学を最もおびやかし、政治学の研究方法に変容を迫っているのが最近の社会学者の業績である。もちろん社会学者たちの研究方法、対象といっても一律ではなく様々な形があるが、その多くは政治分析を研究対象領域に包含している。しかも、その中でとくに顕著な傾向は、それら社会学の政治分析がややもすると従来の政治学を解体してしまうのではないかと思われるものも存在しているということである。具体的にいえば、たとえば、権力関係の把え方を政治学の行ってきたような統治者と被治者、国家と国民の諸関係という形でみるのではなく、抑圧的、経済的、文化的、教育的、家庭的を問わず、社会機構の多数の歯車装置の中に埋没したものととらえ直すのである。

この面での業績として、まず Michel CROZIER の *L'acteur et le système*, Seuil, 1977, écrit en collaboration avec E. FRIEDBERG をあげることができる。彼によれば権力は、もはや国家レベルにはなく、具体的行動体系 systèmes d'action concrets と名付ける産業組織や産業グループの一部門のような中間組織の内部にあり、そこで増大している。ゆえに政治の本質も、従来のような、正当な暴力を独占するための闘争という概念にあるのではなく、分立し、部分的な行動組織 systèmes d'action の産物としての政策決定に存在すると主張する。

つぎに、CROZIER とはやや性格を異にするが、やはり政治学に解体を迫っているのが、Michel FOUCAULT である。彼は、構造歴史学 l'histoire structurale とでもいうべき方法を用いて権力概念を分析する。それによれば、権力は、国家装置の中にあるとか、階級の所有物であるとかみるのではなく、すべての社会的空間に存在し、あらゆる制度を貫いているという。その意味で彼は、政治学は権力の原子物理学の中から始まると主張している。*Surveiller et punir, naissance de la prison*, *La volonté de savoir* (*Histoire de la sexualité, I*; les deux livres parus aux Editions Gallimard, 1975, 1976) が彼の最近の主著である。

さて同じ社会学者でも政治学の解体を望まないのが、Alain TOURAINE である。彼は、総合的な社会学理論の樹立を目標にしたが、まずそのために、社会と政治の間の関係を明確化した。彼にとって、社会学とは社会運動の発展に寄与すべきものであり、その知識は政治行動と無関係のものではない。そしてとくに、社会と政治の関係を分析するにあたっては、社会における手段の支配を求めて争う運動、なかんずく、学生運動、原子炉反対運動、地方分権主義運動のような特殊、個別的な社会運動の考察に焦点をあて、こうした運動が今後の政治社会の主要なインパクトになると主張したのである。彼の影響力は、まだそれほど大きいとはいえないが、ユニークなものであることは確かである。*Production de la société*, Paris, Seuil, 1973; *La Voix et le Regard*, Id., 1978 が主たるものである。

さらに、社会学者 Raymond BOUDON も政治分析に政治社会学を導入している一人である。彼は、方法的個人主義

individualisme méthodologique という分析理論を確立し、社会現象の説明を個々人の諸行動の凝集の形態から行っている。彼の方法もまだ、それほど政治研究には用いられていないが、今後適用される余地はあると思われている。*L'analyse mathématique des faits sociaux* (1967), *L'inégalité des chances* (1973), *Ordre social et effets pervers* (Presses Universitaires de France, 1977) が彼の主著だが、とくに彼の最近の方法論については第二番目を参照。

最後に、Pierre BOURDIEU がいる。彼は現在、directeur du *Centre de sociologie européenne*, Professeur à l'Ecole pratique des hautes études であるが、すぐれて現代的な社会学者の一人である。彼は主として、象徴支配の形態と、支配階級と被支配階級の社会的文化的性格の研究を行っている。彼の研究も、直接、政治を対象とするものとはいえないが、しかし政治現象の伝統的な方法論をおびやかすものであることは否めない。というのも、彼は社会学的決定論の立場から、人間の行動分析を行い、権力状況をも解明しようとするからである。*La distinction* (1979), *Le sens pratique* (1980) がその主著である。

八、おわりに

フランスの政治学は、前述したように、現段階におけるその特徴をあえて一言でまとめれば、伝統的な研究領域や研究方法を固持しようとする反面、社会の大きな変化に直面して、政治学自体もまた、新たな対応に迫られているといえよう。とくに、社会をグローバルにとらえようとする社会学の攻勢にあって、政治学としてはいかにその主体性を確立するかが大きな課題になっているようである。もっともこうした問題は、たんにフランスだけの特殊現象ではなく、各国共通のものであるといえる。リプセットがいうように、社会学はその成立の当初から政治過程と政治制度の分析に強くかかわってきたからである。そして、この問題に対しては、今さらいうまでもないが、政治学と社会学とは、決して相反する、対立的なものではなく、政治学自体も、その社会的基盤にかかわる分析を除いては成立しえないので、むしろ社会学の理論、分析方法を積極的に導入し、その理論体系化をはかっていくべきであると考えるのが自然であろう。アメリカや日本ではすでにその試みが意欲的になされているし、[1] フランスでもその気配があることは前述したとおりである。また、たんに社会学にとどまらず、アメリカの行動論政治学との関係においても、このようなことがいえるがここでは省略する。

政治学に限らず社会科学（自然科学も同様だが）は、今後ますます学際的な傾向が要請されていくであろう。それにともなって、互いの境界領域も変更をせまられるかもしれない。こう考えると、本稿で政治学が社会学の攻勢をフランスでは受けているといったが、これはひとり政治学の問題のみならず、社会科学全般にわたる問題である。したがって、その際大切なことは、伝統的な学問にせよ、新たな理論体系にせよ、各々がつね

にその研究対象や方法を確認しながら、互いに固有の発展および総合的進化に尽力すべきであるということである。よって、フランスの政治学にとっても、今後つねに、政治学の本質とは何か、その境界領域とは何か、という原点的問題を問い直しながら、それでいて積極的に理論的体系化がはかりにくいといわれる政治学の新たな構築、確立に鋭意とりくんでいかねばならないであろう。きわめて当然な、かつ、いうは易く行うは難し結論ではあるが、この点を確認しながら、今後のフランス政治学、およびその学界の動向を興味深く注視していきたいと思うものである。

（1）アメリカはもとよりわが国のものに関しても多数文献はあるが、ここではとくに比較的最近のものとして、日本政治学会編『行動論以後の政治学』（年報政治学一九七六年　岩波書店刊）、秋元律郎・森博・曽良中清司編『政治社会学入門、市民デモクラシーの条件』（有斐閣、一九八〇年）などを例示するにとどめる。

〔注記〕

本稿は Pierre Favre, "La Science politique en France depuis 1945," *Revue internationale de Science politique*, Volume 2 Number 1, 1981, pp. 95—120. に基づき、筆者なりにその要点をメモの形でまとめたものである。したがって厳密な翻訳ではなく、主に一九四五年以降のフランス政治学における主要な研究者とその業績に焦点を絞ってそれらの紹介を試みたものといえよう。とはいえ、そのかなりの部分を P. Favre 氏の見解に負っていることは事実である。またここに紹介した人物や文献も、Favre 氏自身がことわっているように、それが絶対でありすべてであるというわけではなく、あくまでフランス政治学の流れを紹介する文脈の中でとらえたものである。それ以外にも代表的な研究者、業績が存在することはいうまでもない。従来、わが国にはフランス政治学※およびその学界に関するまとまった紹介が少ないことをかんがみ、概略的な形ではあるが、また私的なメモ風の性格のものではあるが、何かの参考になればと思いここに公表した次第である。なお P. Favre 氏は、Faculté de droit et science politique de l'Université de Clermont 所属である。

※松平斉光「フランス政治学界の展望」（日本政治学界編『日本政治学会年報政治学一九五一』岩波書店刊）、木下半治「世界政治学会第5回世界会議とフランス政治学界」（日本政治学会編『政治学の現代的課題年報政治学一九六二』岩波書店刊）。